水稲水不足に対する技術対策

栃木県農政部経営技術課技術指導班

令和８（2026）４月 23 日

１　水稲栽培上の技術対策について

まとまった雨が降らずに、河川の水不足が続くようであると、田植えに必要な代かき作業ができず、田植え作業が遅れる地域があると予想される。そのため、現在育苗している水稲苗の老化を防止して健全に保ち、遅れた田植えに対応できるよう、次の対策を実施する。

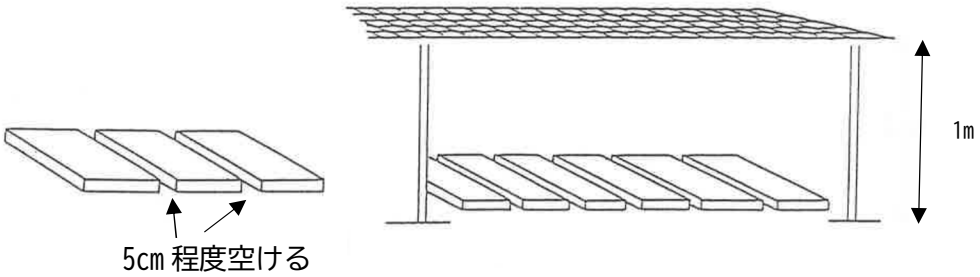
２　育苗管理について

育苗日数の延長が予想される場合、苗の徒長・老化を防止するため、次の対策を行う。

（1）苗箱へのかん水は、朝、十分にかん水し、日中は表面の土が乾いた部分のみ（特に苗箱の回りが乾きやすいので注意）かん水するなど極力かん水量を控える。なお、午後３時過ぎはかん水を行わないようにする。

（2）昼は換気を徹底し、夜間も外気温で管理する。ただし、強風時に苗に直接風があたると乾きやすいので注意する。

（3）寒冷紗等で遮光し、風通しを良くする。また、苗箱を５㎝程度ずらし、箱間の通気を良くする。



（4）播種後 25 日を過ぎると（葉齢 2.5 葉程度）肥料切れにより苗が黄化するので、窒素成分で箱当たり 0.5～1.0ｇを追肥する。追肥後は葉焼け防止のため清水をかける。

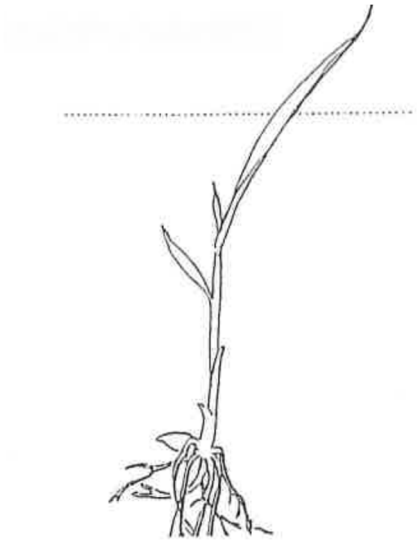
（5）育苗日数が長くなると、ムレ苗が出やすくなるので、タチガレエースM液剤等により予防する。なお、タチガレエースM液剤は、苗立枯病（ﾌｻﾞﾘｳﾑ菌、ﾋﾟｼｳﾑ菌）にも効果がある。ただし、播種時に使用している場合は、再度使用できないことに留意する。

苗が軟弱徒長（苗丈 23cm 以上）し、移植作業に支障を来す場合、以下に注意して剪葉により苗の老化を防ぐ。

①　カット部分は、（徒長苗の場合第２葉、健苗の場合第３葉）葉身の半分を剪定用はさみ等でカットする（移植時の苗丈 18 ㎝が目安）。

②　いもち病が発生しやすくなるので、防除基準に従い薬剤散布を行う。

※　苗が多少伸びても、移植作業に支障を来さず、がっちりした苗質であれば剪葉は行わない。



せん葉する場合の位置

本葉第２葉の中央部又は、本葉第３葉の中央部

３　今後播種する場合

（1） 種籾の浸種が未だの場合は、想定される移植時期に合わせ浸種・播種時期を遅らせる。なお、稚苗の播種量は乾燥籾で箱当たり 150ｇ以下が標準であるが、育苗期間の延長が予想される場合は、やや薄播きとし箱数を増やす。

例）必要箱数（乾籾）150g/箱播き：17～18 箱/10a → 130g/箱播き：20 箱/10a

（2）浸種籾・催芽籾の場合、５～10℃に冷蔵することで浸種籾は約１か月程度、催芽籾は 10～15 日程度保管が可能で、播種を先送りできる。その際、水切りをし、乾き過ぎないようにビニールや新聞紙等で軽く包む。保管後は、浸種等を再開する。

（3）冷蔵庫での保管が不可能な場合は、予定の時期に播種し、２の管理に留意する。なお、浸種期間前半の籾は、水の掛け流し等浸種温度を下げることにより、浸種期間を２～３日延ばすことが可能。

４　本田の節水対策

本田の田植え準備は、次の対策を行う。

（1）代かき前に、ほ場内に通水用の溝を作り（ﾄﾗｸﾀｰのﾀｲﾔ跡も効果有り）、短時間に水がほ場全体に回るように心がける。

（2）畦畔等からの漏水防止をしっかり行う。

（3）代かきのため一斉に取水すると、どの水田も代かき出来なくなるので、地域ぐるみで取水を調整し、計画的に水利用（順番に水を入れる番水方式）を行う。

（4） 荒代・植代の２回実施する余裕が無く１回仕上げをする場合、水持ちを良くするため、代かき回数を多くするとともに丁寧に行う。ハローは高速回転にしない。

（5）水のかけ流しは無駄遣いになるので絶対にしない。